



'96 トアロードフェスタ

～KOBE～風の坂道～



心はずむ秋の連休は、WELCOME TO トアロード

11月21日(木) 23(土) 24(日) 開催

ハイカラ文化の発祥地「トアロード」を中心として「'96トアロードフェスタ」が11月21日(木)、23日(土・祝)、24日(日)の三日間にわたり開催される。三宮神社での復興祈願オープニングセレモニーからスタートし、トアロードのまちづくりについての講演会・シンポジウム、トアロードを代表するレストラン、カフェテリア、バー

ではこの日のために選りすぐったミュージック演奏、神戸を代表する画家による街角スケッチ、外国人倶楽部ホールでの国際色豊かなライブ演奏やバザールなどなど・・・秋の週末を楽しむための催しが目白押しだ。平成8年1月17日に発足された「トアロード地区まちづくり協議会」により、一足早い一周年を記念して企画したこのイ

ベントは、まちぐるみの結束をして震災から一日もはやく復興し、トアロードエリアを新しい品格と魅力ある街にしようという意気込みが感じられる。観光客はもちろん、地元神戸っ子たちも、一步一步復興していくヌーベル・トアロードの街並みを、とくとお楽しみあれ。

●前夜祭

「トアロードまちづくりシンポジウム」

日時：11月21日(木) 午後4時～8時

場所：神戸外国倶楽部

会費：4,000円(パーティ代を含む)

☆前売りチケット好評発売中/詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

《プログラム》

ご挨拶 関西学院大学教授・嶋田勝次

午後4時～特別講演「トアロードと世界」

京都精華大学教授・呉 宏明

基調講演「トアロードの未来」COM計画研究所

代表、立命館大学教授・高田昇

午後5時～シンポジウム／「トアロードの復活をめざして」

【出席予定者】(敬称略)

ウィルエバー(神戸外国倶楽部会長)大角晴

康(阪神・淡路産業復興推進機構副理事長)新

谷秀紀(彫刻家)高田昇(COM計画研究所代

表、立命館大学教授)宮本豊子(兵庫県立生活



大角さん



新谷さん

科学研究所長)
中西省伍(トア
ロード山手会会
長)清水俊夫
(トアロード中央
商店街振興組合
理事長)上根保

(トアロード商店街東亜会共同組合理事長)梁建
緯(一級建築士)

【コーディネーター】

小泉美喜子(月刊神戸っ子編集長)

午後7時～ コミュニケーションパーティー

●トアロード復興祈願

『オープニングセレモニー』

日時：11月23日(祝・土) 午前11時～

場所：三宮神社

会費：無料

【出演】神戸青年合唱団(和太鼓演奏)

神戸少年少女合唱団コスモス(コーラス)

●トアロード音楽祭

日時：11月23日(祝・土) 正午～午後5時

場所：聖ミカエル国際学校3Fホール

会費：無料

司会：小山 乃里子・かどもとみのる

演奏内容：インド音楽、アフリカドラマ、
フォルクローレ、カリプソ、長唄、アコー
ディオンなど神戸ならではの国際色豊かな
演奏が次々と繰り広げられます。ワール
ド・ミュージックに酔いしれて、かたとき
の世界音楽旅行気分を味わうのはいかが？

●トアロード・フェスタ協賛バザール

日時：11月23日(祝・土)

午前11時～午後4時

場所：聖ミカエル国際学校運動場

内容：聖ミカエル国際学校在学生父兄によ
るバザールを展開します。見て回るだけで
も異国情緒たっぷりのお店がいっぱい。

神戸北野 音楽祭



小曾根真



タイガー大越

12/14 Sat.

開場5:00PM/開演6:00PM

新神戸オリエンタル劇場

新幹線/地下鉄新神戸駅よりスグ

〈出演〉

デイヴ・リーブマン(sax)&フィル・マーコウィッツ(p.)

タイガー大越(tp.)&佐伯準一(key.)グループ

キャシー・ガルシア(vo.)&デイヴ・マッケイ(p.)

その他、地元グループ

12/15 Sun.

開場2:00PM/開演3:00PM

神戸外国倶楽部

新幹線/地下鉄新神戸駅より15分

〈出演〉

タイガー大越(tp.)&小曾根真(p.)

時代が変わる

12/14sat.&15sun.

北野界隈のライブスポットにて地元グループによるライブ

※チケットは各店にお問い合わせください

北野倶楽部/シアターボッシュ/ソネ/サテンドール/アルバトロス/サントノ
ーレ/ティファーナ/チャーリーズ/エルバンチョコキタノ/セントジョー・ジャパン/c
mh(セ・エム・アッシュ)/北野異人坂/ホテルグランドビスタ/バンブー/キタノ
サーカス/展覧会の絵/カザブランカ/バラディキタノ/異人館倶楽部パートII/バラ
ディアーム

チケット発売中

12/14、12/15分

前売¥5,000/当日¥6,000

新神戸オリエンタル劇場	
チケットセンター	078-291-9999
チケットぴあ	06-363-9999
チケットセゾン	06-232-9999
ローソンチケット	06-369-6633
関西プレイガイド協会	06-456-2555

お問い合わせ：甲陽サウンズ
TEL.078-882-1574

アール・デコのファッションとその源泉

～20世紀のファッションを決めた『ジュルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード』を中心に～

(ご婦人向けのファッションニュース)



◆とき 平成8年11月23日(土・祝) 午後2時半～4時

◆ところ ホテルゴーフルリッツ15F (アンダルシアの間)

◆講師 伊藤紀之 (共立女子大学教授)

◆参加費 2,500円 (コーヒー付) (税・サービス料込)

◇お申し込みはお電話又はファックスで

ホテルゴーフルリッツ TEL.078-303-5555 FAX.078-303-1332

■講師プロフィール

伊藤紀之 (いとうのりゆき)

1940年東京生まれ

千葉大学大学院工学研究科工業意匠学専攻・修士課程修了

共立女子大学教授

著書/「19世紀ヨーロッパ・ファッション・プレート」共著 講談社1980年

「被服デザインの体系」三共出版1983年

「ファッション・プレートへのいざない」フジアート出版1991年



HOTEL GAUFRES RITZ

ホテルゴーフルリッツ

☎(078)303-5555 〒650 神戸市中央区港島中町6丁目1番
ポートライナー市民広場駅北 神戸商工会議所とツインビル





演劇

★龍の会 第1回公演
「逃亡」

もだかるプレゼント参照

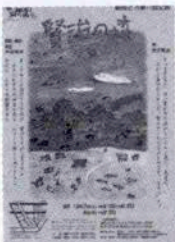
12/6(金) 19:00
12/7(土) 15:00/19:00
12/8(日) 15:00
神戸アートビレッジセンター
KAVCシアター
高遠新開地東改札8階段徒歩5分
TEL078・512・5500
前売2300円 当日2500円



演出・深津篤史

極限状態におかれた人間は
いかに会話し、行動するか。
天安門事件を機にパリへ移住
した劇作家・高行健の作品を
「龍の会」が翻訳上演する。
演出は、関西演劇界のホープ
「桃園会」の深津篤史。チケッ
ト等の問い合わせは、桃園会
(TEL06・233・80
03)まで。

★劇団どろ第71回公演
「賢治の森」



12/7(土) 14:00/18:00
12/8(日) 14:00

神戸アートビレッジセンター
KAVCホール
高遠新開地東改札8階段徒歩5分
TEL078・512・5500
前売2000円 当日2300円

銀河のころをころとし、
自然と対話できるからだを持
っていた賢治。そのすきとお
った詩や童話が語りかけてく
るものは? 脚色・構成・演
出、合田幸平。問い合わせは、
劇団どろ(TEL078・57
6・6488)まで。



映画

★「金色のクジラ」

もだかるプレゼント参照

11/17(土)



西宮アミニティホール
11/30(日)
神戸文化ホール大ホール
12/15(日)
姫路市民会館
前売1000円 当日800円

努は手術室で、金色のクジ
ラに乗った弟の夢を見た。
白血病の小さな弟のいのちを
救うために家族が力を合わせ
る姿を、実話に基づいて映画
化。入場料の一部は骨髄パン
ク運動に活用される。問い合
わせは、兵庫県映画センター
(TEL078・331・6
100)まで。

★アジア映画を観る会

第2回上映会

「友だちのうちはどこ?」



11/30(土) 5:30
神戸市防災コミュニティセンター

高遠田西改札すぐ長田消防署4F
一般1000円 高校生800円

友達の間でノートを開違っ
て持って帰ってしまった小学
生が、遠い隣村に住む友達に

返していく。イランのアッ
バス・キアロスタミ監督のま
なざしが優しい。アジアと触
れ合うことを目的とする上映
会で、主催は神戸アジアタウ
ン推進協議会。次回上映は、
1月25日の「風の丘を越えて
〜西便制〜韓国」。問い合わ
せは、アジア映画を見る会
(TEL078・691・3
746南加工内)まで。関連
イベント「まるごとアジアフ
ェスティバル」は、11月23日
まで長田区総合庁舎7Fで。

★第37回カナート名画祭

ロシア映画祭③

バレエ特集

もだかるプレゼント参照

12/2(月) 56(金)
カナート・ホール
第2神明大久保ICCカナート2F
TEL078・967・5101
4本立1000円(入替なし)



「白鳥の湖」

もだかるチケットプレゼント

★神戸文化ホール大ホール(11/30)
姫路市民会館(12/15) 共通(金色のクジラ) 有効) 5組10名
★神戸アートビレッジセンター(12/6・8「逃亡」有効) 3組6名
★東灘区民センター・うはらホール(12/21・22劇団青い森「よわむしおぼけのたんじょうび」有効) 親子ペア3組
★神戸阪急ミュージアム(12/11・29「黒澤明展」有効) 10組20名
★西灘劇場(12月末まで有効) 5組10名
▽11/16・29「魅せられて」「ジェイン・エア」▽11/30・12/13「男はつらくじゃよ」3本立▽12/14「ブラック・ジャック」
★カナー・ホール(12月有効) 5組10名

▽11/25・30「愛染かつら」「マダムと女房」「風の中の牝鳥」「西鶴一代女」「雨月物語」「山椒太夫」「彼岸花」「サシタカ八番娼館」「望郷」「三婆」「橘山節考」のうち1日1日4本上映(入替なし)▽12/2・6「白鳥の湖」「アンナ・カレーニナ」「ロメオとジュリエット」「イワン雷帝」「スバルタクス」「青い鳥」のうち1日4本上映(入替なし)▽12/7・11/5「ノートルダムの鐘」(午後)▽12/14・11/17「モスラ」(午前)
★ベレーネシネマ(12月有効) 5組10名
▽11/11/29「八つ墓村」▽11/30・12/20「イレイザー」▽12/21「金田一少年の事件簿」
★神戸朝日ホール(12/20・21「フランキー・スターライ

イト」有効) 3組6名
★シネモサイク1154(12月末まで有効) 2名
1▽12/20「ザ・ファン」▽12/21「テラライト」
2▽12/6「戦火の勇氣」▽12/7「インディペンデンス・デイ」
3▽12/13「八つ墓村」▽12/14「モスラ」
4▽「真実の行方」▽次回予定「グリス」
●希望する館名と住所・氏名・年齢・職業・電話番号・趣味・他によく読む雑誌を明記して左記まで。小誌や「もだかる」の感想、よかった映画・演劇・展覧会、最近一番笑った出来事なども書き添えてください。
〒650 神戸市中央区下山手通3-1-18 ツインスタアビル4F「月刊神戸っ子」11月号もだかる係・矢ジマジュン

正統派の傑作「白鳥の湖」から米ソ初合作「青い鳥」まで、バレエ映画6本を上映。他に「アンナ・カレーニナ」「ロメオとジュリエット」「イワン雷帝」「スバルタクス」。1日4本の上映作品は日替わりなので、劇場に問い合わせること。全作見ればあなたはもうプリマ。どんな?

★市民映画劇場12月例会
「フランキー・スターライ
ト」世界で一番素敵な恋

もだかるプレゼント参照

12/20(金)・21(土)
神戸朝日ホール
大丸東へ50m神戸朝日ビル4F
TEL078・331・6362



前売1300円 当日1500円
「星空の」少年、フランキーをめぐる男女の不思議なラブストーリー。出演は、アンヌ・パリロー、マット・ディロン、ガブリエル・バーンほか。神戸映画サークル協議会(TEL078・331・8538)に入会すると、毎月の上映が会員料金に。

もだかる倶楽部

●シネマの券ありがとうございませう。「午後の遺言状」には泣けてきました。演劇「シャトールランズ」にも感動。「宮澤賢治「その愛」は、あまりの純粹さ、その神経の細やかさに、生きていくのは大変だったろうと思えました。
(西区・下川典子さん)

○お便りを月刊神戸っ子もだかる係までお寄せください。採用者には、映画などのチケットを差し上げます。

タカコ アートスクール展

11月20日(水)～25日(月) 6階神戸阪急ミュージアム

開館時間: 11時～7時30分(最終日は6時開館、閉館30分前までにご入館ください)
休館日: 期間中は休まず開館
前期: 11月20日(水)～22日(金)
後期: 11月23日(土・祝)～25日(月)
入館料: 500円(税込)
中学生以下および65歳以上の方は無料(証明書をご提示ください)

主催: タカコアートスクール
日本トータルフラワー協会

神戸阪急11月のお休みは
5日(火)・12日(火)
営業時間 連日11時～7時30分

●次回は1996年度第41回
新聞・通信・テレビ・ニュース報道展です。

神戸ハーバーランド



阪急東宝7/ル

■神戸食文化研究事業

座談会 第2回（1996年6月28日〈金〉実施）

神戸の輝ける歴史を生かした 新しい『食』の時代を提案

◇座談会出席者（敬称略・順不同）

柚木 学（関西学院大学学長）

端 信行（国立民族学博物館教授）

田辺真人（園田学園女子大学短大部 助教）

中村友一（御影貿易商事代表取締役社長）

塩原一正（日本ソムリエスクール校長）

司会

小泉 康夫（本誌代表取締役社長）



去る6月28日に神戸ハーバーランドニューオータニにて「ファッションとしての食に関する座談会」の第2回目が開催されました。神戸は、明治元年に開港以来130年余りの歴史がありますが、都市としての機能が形成され、現在の神戸の原点となるものが出来たのはまさにこの時代からではないでしょうか。近代的文化のある街づくりを進めている新生・神戸のこれからの食文化を提案していくために、まず

[1]「神戸の成り立ち、歴史をふまえた神戸の食に対するイメージ」をお聞かせいただきました。

また財団法人神戸ファッション協会のなかでは、神戸の復興にあたって多彩な案が出されています。その一つとして、工房を街のあちらこちらに作る工房都市文化を取り入れてはどうかという、神戸らしい発想のプランがでてきます。この案をぜひ良い形で実現させるために[2]「〈神戸を工房文化都市に〉という提案に対する具体的なご意見やアドバイス」を頂戴しました。



柚木 学さん
(関西学院大学学長)

食を支える層を 見極めた発想が重要

【1】神戸のグルメは、お金持ちを対象にした贅沢品に重点をおくときもあれば、庶民向けの日用品を中心にするなど、色々な種類の商品が混在して発展してきました。というのは明治時代の開港後、神戸には洋菓子やコーヒールなど、西洋的なものがどんどん入ってきましたが、なかなか庶民の生活までは浸透しきれませんでしたし、ましてやワインやウイスキーは戦後の産物であり、一般の人が飲むようになったのはずっと後のことだからです。

食文化を歴史的に検証し、将来の計画を考えるうえで、「食」を支えてきている人がどういう層だったのか、またどんな層を中心に今後の計画をたてるのかを明確にするべきではないでしょうか。対庶民か、一握りの高級志向の人か、あるいは大多数のグルメグループの人か、神戸に住む人か、観光客か、食文化を支える中心層を見極めることが必要だと思います。

戦後、米食一辺倒の生活から、パンも口にする生活に変わり、野菜や魚を加工した洋惣菜も生活に入ってきました。昭和30年代以降、電化製品や自動車もできてきま

したが、我々はいつも与えられるばかりでした。与えられてきたものから自分で何かを選んで消化していくためには、「豊かさ」が必要となります。だからこそ戦後の「与えられる生活」から解放され、高度成長期に入り、我々が選択できる生活にかわってきた今こそ、真のグルメや食文化が始まるのだと思います。文化とは与えられるものではなく、自分たちで作り上げていくものですから。もちろん、それを支える人も大切です。そういう意識を持つことが、神戸が立ち上がるために重要な要素になってくるのではないのでしょうか。震災から立ち上がり、震災から立ち上がり、次の新しい文化が育っていく。そのなかにグルメの課題も含まれると思います。

神戸に限らず最近、「食」がだんだん「餌」的要素を帯びてきているような気がします。バック売りが当たり前になり、料理の人間が省けるように、例えば魚は家でのおろした形で販売されているし、調理済のおかずを家で温めたらよいなど、どんどん便利になってきています。口にするだけで食事が終わるような時代の流れを踏まえ、真のグルメとはいったい何なのか考えなければなりません。昔のハレとケという言葉の意味からすると料理はハレ、つまり祭りの日の食べ物でした。貧しいけれどもその日はかりはお酒も飲めるのだというハレとケの生活がありました。日常はたとえ餌的な食事であっても、ハレのときにはグルメも存在するのではないかと思えます。

【2】グルメ文化というのは、一方で簡素化されて、歩きながら食べたり、地面に座って食べたりすることが一般的になってきていますが、工房の案におきましても、ただ単に食べられたらいいというのではなく、食べ方にも料理や作法という文化があったことを思い出し、この文化性をもっと出していくべきではないでしょうか。



端 信行さん
(国立民族学博物館教授)

サービス・クオリティを高める 経済システムの確立を

【1】文化産業というのは、人々がその文化を支持するという価値観を前提に成り立っています。例えばコンサートの場合は、興味のある人々の間でしか経済は発生せず、興味がない人たちは経済的にまったく関係のない集団で

す。これまでの日本を含めた世界の産業経済は万人に役に立つという経済原理でしたが、生活が充実してきて真の意味での豊かさが課題となってきたこのからの時代は、人々の価値感がものをいうようになってくると思います。自分が関心のあるものに価値を見出す、つまり値段の問題も大きく関わってくるわけです。いくらお金がかかってもぜひ食べたいものもあるが、一方ではお昼ご飯ならこの値段しか出したくないとか、友達といっしょのときはこのお店に限るとか、ワイン一本の値段は千円なのか十万円なのか…。そのような価値観を前提とする色々な消費経済が産業という単位で動いていくのです。また批評するお客がどの層にいるのかも、この視点で見えていかなければならないでしょう。

この戦略としては三つ挙げられます。一つには文化産業というのは、背景となる都市が文化的バックグラウンドを持っていないと値打ちが出てこないで、神戸文化そのものよりも、神戸という都市がまず文化的方向性を強めていくとともに情報社会の信頼性を持たなければなりません。他でもないアノ神戸で作られている、あるいは売られている神戸の何々だから安心なのだということ。二番目は技術です。どういう形で技術が洗練されていくか。最後は経営。日本のサービス産業は、欧米などの水準に比べると産業としての基盤が弱いというか、日本の観光業や食産業は、製造業に比べて近代化が進んでいません。食文化というのは一種の第三次産業的色彩を強めていくわけですから、サービス業の強化をどれだけ演出できるかが課題だと思います。きちんとしたシステムで社会的にサービス業の質をチェックしてランク付けしていく。むしろ震災という問題を考えれば、経済社会の新しいシステムを目指す経営の組み方がこれからの大きなヒントになるのではないのでしょうか。

【2】今回の神戸の復興に関する工房都市案というのは、一歩進んで文化的発信につなげようという意図があると思います。何がなんでもさらけだしたら良いということでもありませんし、一方では隠す文化ということも必要です。見せ方、つまりどの部分をどう見せるか。これは演出方法によると思います。神戸の復興にあわせた文化発信の拠点としての食文化アトリエといった考え方にしてはいいのでしょうか。ただこれにもプロデューサーが必要ですね。演出の面でどこをどのように見せれば一番いいのか、どこを隠すべきかをよく考えなければなりません。でしょう。



田辺眞人さん
(園田学園女子大学短大部 助教授)

日常と非日常を合わせもつ 食の特色作りを考えよう

【1】神戸では、街の食も歴史上忘れてはなりません。兵庫は、摂津名所図会などに生け簾に魚を飼っている絵がでてきますし、有馬地方は、山中にもかかわらず六甲山を越えることや道があることから、湯治客に対して積極的に水産物も取り入れてもてなしていたのではないでしょう。元禄年間では、灘の名産として六甲山地の急流の水車小屋で作るそうめんがありますし、須磨へやってくる人に、敦盛そばを食べてもらったり、磯馴味噌（そなれみそ）というお味噌を名物にして売っていたという資料も残っています。江戸時代までは、日本的な食品ばかりだったのですが、明治に入り神戸港が開港されると居留地にやってくる欧米人に影響を受け、今のフラワーロードから鯉川筋まで北は西国街道から海岸通りまでに別世界が出来上がっています。住居をはじめ、服装や食事も洋風化し、そんなうわさを聞きつけた人が集まり、色々な食べ物を神戸に持ち運んでくるのです。清国からやってきた中国人は、日本と条約を結んでいなかった

め居留地に入ることができず、西側に南京町を作り中国料理を持ち運んできました。大正時代に入ると、ロシア革命がおこり保守派のロシア人が日本に逃げてくるのですが、アメリカあたりに亡命しようと船待ちをしているあいだに神戸に住み着いてしまい、東欧の料理も入ってきます。このように神戸の食文化について歴史的に見た場合、悪く言うところと寄せ集め、良く言うところと寄せ集めたケースモボリスのような独自の食文化が作り上げられた経緯があったことがわかります。

昔、神戸は、住むところとして人気がありましたが、今や若い人が遊ぶ街に変わってきているように思えます。住むという事は日常的生活、遊ぶという事は非日常のことを意味します。地震がおこらなければ、神戸はその両面の特徴を持つ土地になっていたのではないのでしょうか。今後復興していくうえでこの二つの面は大切にすべきです。食に関して言えば、非日常的とは、高くてもよいからどうしても食べたい特別な食べ物をつくる、日常的には、料金が高すぎない一般的な料金設定にする、など。神戸には、フランスやロシアのレストランなどもあります。一般的な洋食屋も多い。中華料理も、北京や上海などをうたう店がある一方で、大衆中華を全面に出した店もある。神戸はどちらの面も似合う街であることを根底に、日常的生活と非日常的生活が満足できる二つの面で食産業が進んで行くことを願います。

【2】前述の江戸時代の兵庫の生け簾でも、旅人が魚を見ている図が名所図会に載っていますし、震災前、すでに灘の酒蔵地帯では、歴史的な酒造りの道具や蔵を公開し、それと今の醸造工場を組み合わせた観光コースが好評でした。同様の工夫を他の食の分野にも広げて、新しい街作りを進めてはどうでしょうか。



中村友一さん
(御影貿易商事代表取締役社長)

神戸の景観に似合う 店・商品開発を

【1】私の実家は京都で料理屋を営んでおり、私自身も長年

京都に住んでいて感じていましたことは、京都は資源に恵まれない土地だと。ですから京料理のルーツは乏しい食材を手間ひまかけて、味にうるさい公家や旦那家に供した「料理職人の加工技術」ぬきには語れないのです。一方大阪は、「食い倒れ」と言われ、うまかろう、安かろうと、エネルギーで食に対する食欲が見られます。では神戸はどうか。欧米文化との接触が多い土地柄であったために、神戸の人達は、海の向こうに眼を向けて大阪や京都が苦手とするコンセプト、つまり「ハイカラ食文化」にチャレンジし、味の独自性を確立してきました。伝統や先代の歴史という足枷がなかったために、神戸の食産業は開港以来ユニークな冒険ができたのかもれません。

卑近な例が「ラムネ」。布引に湧く炭酸水を「布引サイダー」と呼んでいたそうですが、もともとは「レモネード」が「ラムネ」に転訛したわけです。「レモネード」

という「ハイカラ食文化の産物」を「ラムネ」という日本的な飲み物にブレンドして売り出した。まさに神戸人の知恵でしょう。

外来文化を旺盛に吸収し、消化して神戸の風土に同化させる努力が続けられてきました。神戸の食文化とは、単なる洋風文化の模倣のみに終わらず、それを神戸ナイズした味として定着させてきたことに意味があるように思います。異国の味が輸入され、その土地の風土にマッチするよう改良されると、本場の味とひと味違う魅力を増すこともあります。例えばバリのシヤンゼリゼにカフェが似合うように、京都の嵯峨野に茶店ちやみせが似合うように、神戸は港町と六甲山の素晴らしい背景の中でどんな店が似合うのか；そのような場所を見いだし、神戸オリジナルの味がどのように開発されていくのか。それが神戸の食文化に対する今後の宿題となるでしょう。

【2】一時期、大きいことはいいことだと何でも大規模化することが流行しましたが、最近では『デ・マシフィケーション (De-massification)』つまり、ダウン・サイズすることによるモノの密度や緻密さを求める傾向にあるようです。そういう意味で『工房』は、大工場ではなく、小さなワークショップ規模でモノを作ることであり、作る側の生命が込められているように思います。例えば音楽でも、学生が正しく音符通りに弾くの聞いても面白くないでしょう。プロのミュージシャンが奏でる音は、少し間違っているのではないかと思っても、実はその人のノリやアドリブが曲を生かしていることが多いものです。大工場で規格通りに作られたステレオタイプな商品よりも、ワークショップで作られた職人の生命と心の通った商品の方が人にアピールすることもあります。工房文化都市家は、神戸のオリジナルなプロジェクトに成りうるでしょう。



塩原一正さん
(日本ソムリエスクール校長)

食のイージー・オーダーシス テムで文化を育てる

【1】神戸は、あまりにも食材に恵まれ過ぎていたので、食文化は育たないのではないかと懸念しています。「恵まれた食材をいかにそのまま食べるか」では食文化にはなりません。また、神戸には食文化のわかる職人が育たないと言われますが、それは「あそこめしはうまいが料金が安いからな」という価値観に起因するのではないのでしょうか。文化とは、ある程度お金がかかるものです。食文明ではなく、食文化を育てるためには、料理人や職人をしごけるお客が増え、客同士あるいは客と料理人とのコミュニケーションをもっと活発にする必要があると思われまます。

神戸には国内外の外来文化を受け入れる下地がありました。しかし、受け入れたものを大量生産するだけでは文化にはなりません。例えばファッション文化の世界には、大量生産のレディー・メイドと受注少量生産のオーダー・メイドの他に、その中間のイージー・オーダーがあります。神戸の食文化を育てる道はこのイージー・オ

ーダーが適切ではないでしょうか。ファミリー・レストランの料理、これはレディー・メイドの大量生産でいいわけです。食におけるイージー・オーダーとは、コストを下げるために基本になるメニューがあつて、そのなかである程度好きな料理を選ぶことができたり、少々お金をかければ、トリュフ、フォアグラ、キャビアが食べられるということになります。この食のイージー・オーダーによつて、あまりお金をかけずに、神戸に食文化が育つ可能性があるのではないかと思います。

また日頃お店ではテーブル・クロスはかけていないけれども、「今日このお客様には幸せなことがあつたようだ。テーブルにクロスをかけてあげよう」などというホスピタリティにはあまりコストはかかりません。神戸では外来文化を積極的に取り入れ、おいしいものを作れるようになったけれども、お客に対するホスピタリティはまだ充分とは言えないのではないのでしょうか。たとえ経営者がホスピタリティを持っていても、第一線のサービスマンが持たなければ結果としては同じだし、またお客も本当のホスピタリティを理解していないので、あまりそれを期待しない。これらの点を改善していけばもっと神戸の食文化が発展していくような気がします。

【2】人間は何か一つのものを与えられると原材料は何であるのか、どうやって作られたのかと色々興味を持ちます。店で食べたものを真似して作りたいと思う人もいます。ようし、そこが料理工房になっていて、調理をしているところをすぐ近くで見ることが出来れば、その料理に非常に興味がわいてきます。これはたくさんの方が神戸に来るきっかけにもなるでしょうし、また料理の道で何かしようとする意気込みのある若い人たちにとっても有効なことでしょう。

精巧なかつらのように本物の顔と見分けがつかない精巧なマスクが普及すればいいのにと田中氏は思った。そうなれば、流行の顔をいくつか持っていて、その日の気分で自分の好みに合った顔面を出かけられる。寝る時にだけ取り外すタイプとか、二十四時間着用OKのタイプとか。そんな風になれば、顔の美醜なんて問題じゃなくなるだろう。だって、マスクさえ被れば、みんないつだって自分好みの美しい顔になれるのだから。それは、美しい顔に生まれついた人間だけの特権ではなくなるのだから。そうなると、かえってマスクにはないような個人的な顔が珍重されるかもしれない。

なんとなく気分は憂鬱だったが、田中氏は薄くなりかけの髪の毛を整える作業にとりかかった。

「ヘアスタイルでかなりごまかせるぞ。不細工なやつだってトレンドイイな髪型してるとそれなりに恰好よく見えるもんなんだ。今の若いやつらが恰好よく見えるのもそのせいさ。女の子だってそうさ。ショートヘアだとなんでもないのが、ロングヘアにすればそれなりに見えるだろ。だから、おまえの……そのなんていうのかな、昭和スタイルっていうのか、戦後をひきずってるようなスタイル、変えたほうがいいんじゃない」

同僚の鈴木はそんなアドバイスとともに、彼所有のヘアスタイルブックの中から秀れものを一冊貸してくれた。

「アートでいけ、アートで」と鈴木は言った。

「長髪にしているとなんとなく芸術家ばく見えるだろ。それとも丸坊主にするかな。あるいはとことん変わった形もいいな。ピートルズしてる奴とか頭の後ろで髪の毛を一括りに結んでる奴とかモヒカンとかチョンマゲにしてる奴とかいろいろいるだろ。あれなんかみんな少しぐらい不細工でもその不細工さが結構様になってるだろ」

田中氏は悩んだ末、きょうの日のために鈴木氏の紹介でわざわざ何十万円もするノスタルジックな長髪かつらを購入していた。本物の髪の毛が伸びるのを待つには時間がなさすぎたし、間に合ったとしてもヒッピーまがいの長髪で職場に出かけていくわけにもいかない。そんなことをすれば、すぐにサヨナラを言い渡され、公園で自由な時間をたっぷりと味わう身になってしまつたらう。田中氏は髪の毛を整えた後、その上に高価なかつらをゆつくりと時間をかけて装着した。それから、後ろの髪をひとつかみすると、別注の黒いゴムで結んだ。その瞬間、鏡の中の彼は変身した。

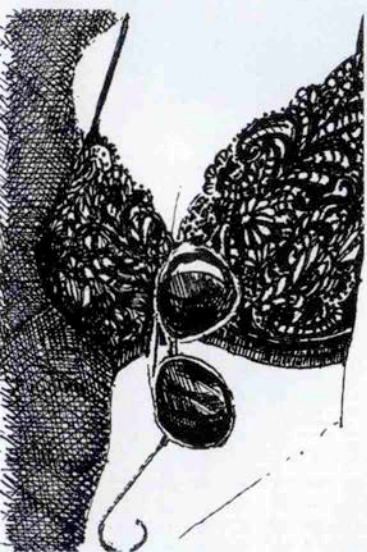
「グレイト！」

田中氏は思わず叫んだ。心の中に激んでいたつまらない買物をしたんじゃないかな、という後悔の思いは木っ端みじんに吹き飛んだ。かつらをかぶった瞬間、昆虫が脱皮するように田中氏はうだつの上がらない経理マンの殻から抜け出した。少なくともそう彼には見えた。鏡

回 一 夫 理

2 ヴ

第 デ 達



ブルー・ラン



光

澤

村

森

木

絵

の中の田中氏は別人のように生氣に満ちていた。彼は鏡に向かってにんまりとほくそ笑むと、「やあどうも、私が田中孝介です」と、力強く語りかけた。それからすぐに「俺は田中孝介だ!」と、荒々しく言い直した。その声は自分でも驚くほど迫力に満ちていた。次に、これも鈴木氏の指示どおり、レイバンの黒いサンングラスをかけ、鏡に向かってはすかいに笑った。

「グレイト!」

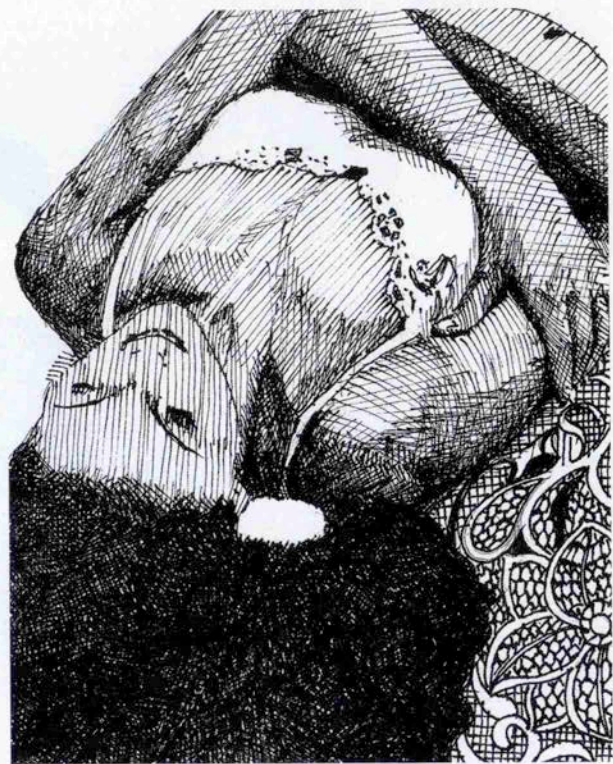
田中氏はもう一度叫んだ。それから、口笛でブルースを吹こうと試みたが、唾が鏡面に飛び散っただけで、これはうまくいかなかった。

まあ、そのうちうまくなるだろう、と彼は楽観的に考えた。これからはこのウィッグを被って、憧れていたド

ラムスやトランペットにもチャレンジしてみよう。ジャズで恰好いもの。それに、レゲエにサーフィンやスキューバダイビングも。

田中氏はこの日のファッションについても、鈴木氏からレクチャーを受けていた。できるだけ、ラフで自由な雰囲気にする。彼はその教えに完璧に従った。もう少し背が高くて、腹がへっこんでいて、肩幅が広くて、足が長ければ、このジーンズもデニムのジャケットももっと様になったのだろうけれど……しかし、まあそんなに悪くはない、と田中氏は思った。

とくに、特注のハイヒールのブーツを履いた感じは最高だった。ただでさえハイヒールなのに靴の中にも仕掛けがしてあって、その靴を履くと背がさらに十センチ高



く見えるっていうやつ。そのぶん、視線も十センチ高くなり、十センチ高い世界から世間を見下すことができた。チビの田中氏にとつて、かつらと同様この靴はまったく革命そのものだった。まさに田中氏のルネッサンスだった。

☆

かつらとサングラスと特殊靴と自由な服装で武装した田中氏は、ベーターペンの第九を口ずさみながら、アパートの廊下をスキップを踏んで進んだ。そのため、薄暗がりを向こうからやってきた女性と、危うくぶつかりそうになった。昨日までの田中氏ならすぐに「すみません」と口に出し、深くこうべを垂れていただろうけれど、その日の彼は違った。「馬鹿野郎！ ぼやぼやするな！」と、大声で怒鳴った。その声に気圧されるように、相手

の女性が脅えた声で「すみません」と小さく言った。その時、田中氏はそれが隣室の大滝女史だと気づいた。田中氏にとつて、この女性は天敵だった。ハンディカラオケでサザンオールスターズの歌を練習していると、「うるさい！」と怒鳴りこんで来られたり、飲んで夜遅く帰宅した田中氏が鍵をあけようとしていると、「静かにしてよ。今何時だと思ってるの！」と、ドアのところから首を出して叫ばれたり、「あなたの部屋が不潔すぎるからあたしの部屋にまでゴキブリがわくのよ」と因縁をつけられたり、とにかくことあるごとに田中氏はこの女性に責められていた。しかも、彼女は田中氏にとつては最も苦手なインテリ階層に属していた。商業高校卒の田中氏はインテリに常々嫌悪感と劣等感、それにその裏

返しともいえる憧れの感情を持っていたのだが、そんな田中氏にとって、パリからの留学帰りで、フランス語の翻訳をやりながら女子大の講師も務めているという大滝女史の存在は、十分圧倒されるものだった。

それに、大滝女史の留学していたというフランスは、田中氏の憧れの土地でもあった。フランスと聞いただけで田中氏はわくわくした。自分がフランス人だったらどんなによかっただろう、といつも田中氏は思っていた。彼の部屋はフランス映画のビデオや、日本語に訳されたフランスの小説や雑誌、それに習得途上で挫折したフランス語の教材テープで埋まっていた。いつの日か、フランスに行つて、本場のカフェに入り、本物のフランス人と話ができたらどんなに幸せだろうといつも考えていた。しかし、自分の醜さを考えると、フランスに憧れていると口に出しては言えなかった。フランスと自分は対極にある、と田中氏は自虐的に考えていた。フランスに憧れています、フランス・フリーク、フランスが趣味なんです、なんてことを言うとかっこ悪い者になるのがおちだとも。結局、フランスへの憧れは憧れに終わるだろう、夢のまた夢に終わるだろうとも考えていた。

フランス狂いの田中氏にとって、100パーセント日本人のくせしてフランスの言の葉を自由自在にあやつる大滝女史はただものじゃなかった。普通の人間じゃなかった。もしかしたら狐つきかもしれない、それもフランスの狐、そう考えて、田中氏は大滝女史に畏怖の念さえ抱いていた。そんな女性性を、今、怒鳴りつけることができたんだ。そう思うと、田中氏は感激で胸が熱くなった。怒鳴りつけるどころか、今なら彼女をレイプすることだってできると、田中氏は思った。今まで、大滝女史に会うたびに、うだつのあがらぬ男として侮蔑され嘲弄されているように感じてきたのだ。緑なし眼鏡の奥に潜む切れ長の目、その氷のように冷やかな瞳がそのことを語

っていた。「あなたはなんて頭が悪いの。ほんと、信じられないわ。それに、下品で、デリカシーがなくて、鈍感で。あなたみたいな人がこの世に存在するなんて、ほんと我慢できないわ」って。

そんな男に怒鳴りつけられていることに、大滝女史は少しも気づいてはいなかった。たぶんアパートの廊下が薄暗かったし、田中氏の変身が功を奏していたせいだろう。もつとも、変身しているのは、田中氏だけではなかった。大滝女史も、その日はいつもと違っていた。いつもの喪服じみた地味でおとなしく陰気な服装とは異なり、体にびったりとはりつき体の線がくつきりと浮き出て見える薄いグリーンワンピースに身を包んでいた。田中氏はサングラスごしに、大滝女史の姿を嘗めるように見つめた。

なんてイイ体をしているのだろう。スタイルの良さは普段の姿からも想像はついたが、これほどまでに素晴らしきとは。

田中氏は彼女を全裸にした時の光景を頭の中に思い浮かべて思わず唾を飲み込んだ。

縁なし眼鏡をかけた彫の深い端正な顔には、いつもと違ってきちんと化粧も施していた。くつきりとした目鼻立ちの大滝女史の顔を、化粧が一層美しく際立たせていた。こんなに美しい人だったなんて……田中氏は呆然としてしばらくその美しさに見とれた。

大滝女史は「すみません、すみません、すみません」と、田中氏に向かってたて続けに頭をさげると、廊下をエレベーターのある方向へと歩いていった。田中氏はその場に突っ立ったまま、下半身を熱くして大滝女史の後ろ姿を見送った。デートの約束なんかすっぱかして、このまま彼女の後についていきたいと、田中氏は一瞬に思った。

〈以下次々号〉

神戸型破り人物伝

その2 インターネットはマンダラだ！ 被災地の映像を世界に発信

神戸市広報課職員 松崎太亮さん

★歩いて歩いて

松崎さんはよく歩く。この日も自宅から待ち合わせ場所まで、四十分かけて歩いてきた。

「時間はかかるけど、ふだん考えんことを考えられるでしょ。この店うまそうやなとか、あの女の人きれいなあとか、くだらんことですけど」

学生時代は、インドや中国、東南アジアを歩いた。

「国によって時間の流れる早さが違って、インドなんかはゆったりしてましたね。歩くというのは、せかせかした日本の時間の流れを変えてみるというところもあるんです」

★助けに来る人の指標になれば

あの日もよく歩いた。一九九五年一月十七日、自宅近くの山に登ると、神戸の東側は真っ暗だった。須磨から自転車で、板宿や鷹取を経て神戸市役所の震災対策本部へ。その間、メモをずる代わりに各地の状況をビデオカメラに収めた。

次の日には、その映像をインターネットで世界に発信。火災地域を示す地図をおそらく最初に流したメディアだろう。もちろんその情報は、松崎さん

が自分で歩いて得たものだ。

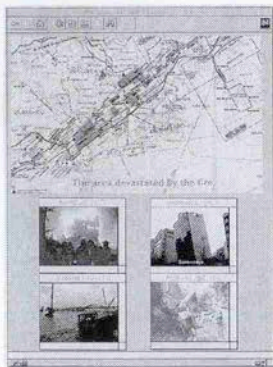
「いまから思うとええかげんな地図やつたかもしれへんけど、とにかく助けに来てくれる人のための指標となればと思って」

しかし、被災者自身に対しては役に立たなかったのではないかと反省しているという。

★インターネットはええかげん？

「インターネットの良さって、ある意味でええかげんなところですね。Aの情報に直接つながらんかったら、BやCを経由してAにつながることできるでしょ」

ある一点に到達する道はひとつではなく、回り道も用意されている。デジタルは合理的だといわれるが、柔軟な側面も併せ持っているのだ。



神戸市のホームページアドレス
<http://www.kobe-cufs.ac.jp/kobe-city>

●まつざきたいすけ
1959年生まれ。1984年神戸市入庁。福祉事務所、交通局、開発局を経て、1993年から広報課職員。1995年1月18日、被災地の映像をインターネットで世界に発信。現在、サンテレビ「すてきに！神戸」のプログラムディレクター。神戸市須磨区在住。



映画監督の青池憲司さん(左)と松崎太亮さん。
カトリック鷹取教会で

そんな縦横無尽なコンピュータの世界は、チャットで見た曼荼羅の図に似ていると語る。

「歩いて人に出会うこともインターネットでアクセスすることも、同じ人間の営みなんですよ」

将来は、震災などで負傷した世界の子どもたちを励ます活動をしたいという。
(本誌・矢ジマジュン)